

菊池武光と大保原合戦

今年は大保原合戦（大原合戦）の650周年に当たります。古戦場大保が所在する小郡市では、今年4月から、これを記念してシンポジウムや企画展示、記念碑の建立など多くの事業が行われましたので、ご存じの人も多いかもしれません。

大保原合戦は1359年8月6日、菊池武光率いる南朝方と少弐頼尚率いる北朝方とが大保を舞台に両軍入り乱れての死闘を展開した、大変著名な合戦です。南朝方が勝利したとされ、北朝方は頼尚の息子直資が戦死するなど、相当なダメージを受けて大宰府へと退却しました。少弐氏が衰微する最初の要因となった、あるいは、後の南朝勢力の躍進の契機となった戦闘であると位置付けられています。

菊池氏は肥後国を本拠とする武士で、南北朝時代には九州南朝方の中心勢力でした。武光はなかでも非常に活躍した人物で、薩摩谷山にあった征西將軍宮懐良親王を本拠地の肥後菊池に招き、南朝方として大きな軍事力を征西府に提供しました。

一方の少弐頼尚は以前資料室だよ

太宰府人物志

資料室だよ④

りでも紹介しましたが（平成18年11月1日号）、当初北朝方で、足利直冬が九州入りすると直冬方へ、直冬が長門へ移ると今度は南朝方へ、各勢力を渡り歩いた人物でした。

実は、1353年2月2日の針摺原合戦では頼尚と武光は味方同士でした。鎮西管領一色道猷の勢力に本拠地大宰府を攻められ、窮地に陥っていた頼尚は、それまで敵対していた菊池氏が味方をしてくれることで、この合戦に勝利したことを大いに喜び、「今より後、子孫七代に至るまで、菊池の人々に向けて弓を引き矢を放つこと有るべからず」という内容の起請文（神仏への誓約書）を書いたといえます（『太平記』）。

この合戦の前後、頼尚は南朝方へと転じたのですが、1359年4月までには、再度北朝方へと寝返ったようです。大保原合戦では、菊池氏は前述の起請文を自軍の旗に取り付け戦闘したといえます（『太平記』）。頼尚の心変わりを広く人々に知らしめ、辱める目的でこのような行動を取ったのでしよう。

市史資料室 朱雀 信城